

ぐるっと音楽紀行

旅するピアニスト

赤松林太郎

♪ 6

ハンガリー・
ヴァーツ



3月の最終日曜日から、ヨーロッパは一斉にサマータイムに入る。この日から約半年間、世の中は1時間早くなる。なかなか日の落ちない季節が到来。高緯度の場所ほど、生活の大半を太陽と過ごすことになる。

スマートフォンやタブレット端末は自動的にサマータイムに切り替わるが、生活の中にあるすべての時計が1時間早くならなければ混乱は必至。まずは身の回りの時計を早送りすることから始める。

そして街に出る。この日の待ち合わせには裏切られること数知れず。ヨーロッパは先進国でさえアナログ感たっぷりのところが多いので、街中で時計を手巻きする風景にはさほど驚かなくなった。そもそもその時刻が正しかったのだろうか、そう思わせる時計も少なくない。コロナ禍になるまで、春は必ずハンガリーで過ごしていたので、春風で心が浮かれ出す頃のドタバタを何度となく見てきた。

春風に心浮かれる季節



春はハンガリー国立リスト・フエレンツ音楽大学(リスト音楽院)との共催によるマスタークラス(第5話)が恒例。そして練習会場として使わせていただいているブダペスト9区音楽学校では、当

時の校長の厚意もあり、日本人も活動的なピアニストで、彼女との交流の中から国際音楽コンクールが誕生した。

「ダヌビア・タレンツ国際音楽コンクール」の記念すべき第1回は2016年、ヴァーツで開催さ



①ヴァーツの駅前通り(2014年)
②ハンガリーとハプスブルク帝国との戦いを再現した記念イベント(2019年、いずれもハンガリー(赤松林太郎さん提供))

れた。ヴァーツはブダペストから北へ約30km、人口3万人ほどの小さな街だが、街の中心にある大聖堂はハンガリー最大級の規模を誇る。コンクールの会場は小さな公民館で、テレビ中継されるような第一級のイベントでもない。ただヨーロッパでは、このように街や地域を挙げて音楽やスポーツを振興して、その街の歴史や伝統の1ページとしてきた。

4年目からは開催地をヴァーツからブダペストに移し、隣国のウイーン、そしてイタリアのローマでも別のコンクールをフランチャイズ開催するまでに急成長した。共に二重帝国を担ったハプスブルクの首都、そしてヴァーツの起源となるいにしえの都でもハンガリーの国旗が掲げられたわけで、ハンガリー人にしか理解できない感慨があるのだろう。

国境をまたぐことが困難になって以来、多くのことがオンライン化した。コンクールも例外ではない。ふとした時、ヴァーツの駅前通りで咲き誇る桜の並木を懐かしく思うことがある。日本の桜とは情緒が異なるが、いかにもハンガリーといわんばかりの重厚感ある八重の桜に郷愁を覚える。ハンガリーとの縁が長くなってきた証しなのだろう。

◇第2月曜に掲載します。



あかまつ・りんたろう 1978年、大分県生まれ。2歳から神戸で育つ。兵庫高、神戸大発達科学部卒。パリ・エコール・ノルマル音楽院高等演奏家資格首席取得。2007年に帰国し、国内外で活動。洗足学園音楽大客員教授、大阪音楽大特任准教授。神戸市在住。

